

台などで地形や地層、地下水などを実際に観察させて教えることを試みていたとのことである。」と記している。若林がベスタロッチの理論と自己の体験とによって著した「地理小学」は、中川氏がこれが90年も前の教科書かと思わせるものがあると記したすぐれたものであった。しかし、若林は惜しくも30才で肺結核によって他界する。そしてこの画期的な地理教育も挫折したのであった。

人はよく福沢諭吉の「世界国尽」以来の地理学重視を賞讃するが、それは単に世界の国別知識の暗記にすぎなかった。地理学は地理的知識の暗記詰め込みではないのに、現代に至るまでそのように考えている官吏や事業家たちがあとを絶たないのは、1つには慶応義塾の学風であろう。その証拠には現在に至るまで、慶応大学には地理学科あるいは地理専攻コースが設けられていないではないか。福沢の地理学重視の限界はこんなところにあるのではあるまいか、とんだ横道に入ったが、フィールド・ワークの文化財的存在が、このお茶の水橋附近なのである。だから、かつてそこにあり、今もその名を冠する「お茶の水女子大学」も、当然フィールドを重視しなければなるまい、ということが言いたかったのである。

若林はおそらく、あのお茶の水橋から眺められる断崖を登降しながら、地層や湧水を実地に観察させ、児童たちも眼をかがやせて新しい知識を体験したのであろう。いま、この崖は緑に覆われて、地層は石垣にかくれ、20年ほど前までは何か所も認められた湧水もほとんど見えなくなった。おそらく本郷台が全面的にコンクリートの建物と舗装によって地下水脈が濁れてきたからであろう。一地理学徒として惜しい気がする。

(1980.12.31)

地震の講義を受け持って

諏訪 彰

式正英先生の御紹介で、昭和55年度から、地震の講義（地理学特講）を受け持たせていただいている。旧制長野県立諏訪中学校で故三沢勝衛先生に教えていただき、また、気象庁で、35年にわたり、地震・火山活動のいわば臨床医を務めてきた自分の持ち味をいかした講義にしたいと、念願している。

元来、全世界の地震の1割余が狭小で人口過密な日本列島と付近の海底で発生して、しばしば惨害を生じ、特に、死者数では、数ある天災の中でも、断然、トップである。そのうえ、昭和39年の新潟地震で、現代都市の地震に対するもろさが露呈されたのを契機に、故河角広先生が「69年周期説」をかかげて、特に関東南部の震災予防策の緊急性を強く訴え、また、昭和40年に、萩原尊礼先生をリーダーとし、関係の諸調査研究機関あげての「地震予知計画」が発足し、44年に「地震予知連絡会」が創設されてから、この方面の観測・研究は長足に進歩し、かつ、地震に対する官民の関心も急速に高まってきた。

このような情勢の中で、地震予知技術はまだ開発段階にあるが、一部実用化の見通しがついたという前提にたって、昭和53年に「大規模地震対策特別措置法」が施行され、翌54年には、同法に基づく「地震防災対策強化地域」として、まず、東海地方の6県170市町村が指定され、「地震予知情報」～「警戒宣言」が出された場合の防災訓練なども、各地で盛んに繰り返されている。地震対策の画期

的な前進と言えよう。

しかし、この一連の地震対策は、地震予知に頼り過ぎ、「警戒宣言」が出されたら、どう対応するかということに、官民の関心が集中し過ぎているきらいがある。更に、東京などが、近い将来、破壊地震に襲われるのは、いわば当惑確実であり、しかも、それは東海大地震以外の地震である確率が大きい、そうした地震の予知は、全くお手上げである。地震の予知・予報をあてにして、他の様々な防災努力を怠ってはいけないと思う。

つまり、震災防止の実をあげるには、地震に対する正しい知識や「大地震の時の心得」を普及、徹底させ、耐震・耐火の家造り・街造りを推進すると共に、非常の場合にも互助連帯の精神を貫けるような政府と国民、人と人との信頼関係を育成することが、先ず、肝要である。お互いにいがみ合っていては、破壊地震に対する不断の備えも進まず、いざという時にも歩調が合いがたい。

このように、物心両面で地震に強くなることと、地震予報とは、あたかも、鬼と金棒の関係にある。役に立ち得る金棒を造るのも至難だが、それを使いこなせない虚弱な鬼では仕方がない。また、体力はあっても、頭の狂った鬼では、金棒は凶器に化しかねない。そんなちぐはぐな鬼と金棒ではなく、「鬼に金棒」の地震対策を遂行していくべきである。

以上のような認識に基づき、この講義では、地震とは何か、その原因や仕組み、各種の震災、地震予知への観測・研究の歩み、予知・予報をめぐる諸問題、震災防止の具体策などについて述べる。例えば、東京などに破壊地震が来襲する恐れはどのくらいあるのか、それを克服するには、どうしたらよいかといったことも、勉強してみよう。この講義が、地震そのものを正しく知り、正しく恐れ、正しく備えるのに役立てば、本望である。

『日本の水—その風土の科学—』を出版して

新 井 正

昨年夏、『日本の水—その風土の科学—』を上梓した。この本の題名は、刊行の日も近い再校のときにやっと決めたもので、内容に加えて販売上の都合をも考えた苦心の作である。

本の主題は、熱収支と水収支とを基礎において、水と気候と土地との接点の問題をとりあげた。内容としては、日本各地の「水」の量や温度を、世界の水のなかに位置づけながら、私自身の調査の例によって、風土のなかで形成される水の特徴を描いた。基本理念となる熱収支については、全体を通してその重要性をのべた。

地理学では、風土論や環境論が分布論と同様に重要であることは言うまでもない。しかし、現在のところ地理学者の風土論的あるいは環境論的な感覚はかなり希薄であり、そのうえ風土論・環境論の教育・啓発の方法もはなはだ不十分である。しかし、このような議論こそ、地理学が卒先して扱わねばならないテーマの一つであることは疑う余地がない。そこで、私は自分自身への反省も少し含めて、この本のなかで「水」を「風土のなかの水」として把えるようにつとめた。元来私のフィールドは、非常に微細な測定が主体であるが、この本のなかでは微細な話や面倒な式はできるかぎり省略し、広